

日本福祉大学福祉社会開発研究所 『日本福祉大学研究紀要 - 現代と文化』
第 122 号 2011 年 1 月

実践報告

社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成

——「つながる力」へのアプローチを目指して——

岡 多枝子

1. はじめに

(1) キャリア形成への導入教育

福祉分野における不十分な労働環境や否定的イメージの影響を受けて福祉離れが進み、社会福祉系大学の入学者数や卒業後福祉系進路を選択する者の減少¹⁾など、社会福祉従事者養成の根幹を揺るがす事態が進行している。こうした中で社会福祉従事者の質的・量的担保の重要性が高まっている。とりわけ、福祉分野のリーダーとなる社会福祉系大学生などのキャリア形成に対する検討は喫緊の研究課題となっている。

対人援助職として求められる学生の資質には、社会福祉の理念と専門的知識や技術が重要である。これらの条件を具現化していく為には、「つながる力」の形成・獲得が必要であると考えられる。そこで、本研究では筆者の教育実践を研究対象として取り上げ、教育者としてのアプローチである授業形態の模索、それらを客観的に判断する論拠となる学生のレポートや実証的研究などにより、社会福祉学の視点に立って、研究者としてのアプローチを行いたい。

キャリアという概念が早くから定着していた米国では、Super が「職業的成熟」(Vocational Maturity) という定義で職業的発達理論を提唱した。1970 年に米国連邦教育局の Marland 長官は、「初等・中等・高等・成人教育の諸段階で、それぞれの発達段階に応じ、キャリアを選択し、その後の生活の中で進歩するように準備する組織的、総合的教育」を「キャリア教育」(Career Education) と定義した。また、Crites (1973) は、「キャリア成熟」(Career Maturity) の変数を、選択の態度、選択の知恵、選択の能力、選択の一貫性などとして示した。さらに、1974 年の初等中等教育法 Section 406 では、キャリア教育を学校と社会との関係性を強めることや、カウンセリングなどの機会をすべての生徒に提供すること、教育過程を雇用や社会に拡大することなどとした。Fitzgerald (2006) は、Career Ladders すなわち「上昇移動が可能なキャリアのハシゴ (筒井：2008)」の戦略と実践例を紹介している。

本稿で研究対象として取り上げるのは、日本の社会福祉学教育・研究における教育機関の中

核²と位置づけられている社会福祉系大学に在籍する大学生である。日本における社会福祉系大学は、「社会福祉士及び介護福祉士法」に基づく社会福祉士国家資格取得などの目的を持って入学する大学生が少なくない。その様ないわゆる、専門性（専門的知識及び技術）の獲得・発達を軸とした教育スタイルは、今日の社会福祉系大学の典型的な姿のひとつである。しかし、本来の大学教育が目的としているアカデミックな研究を通じた人格陶冶や大学における教養教育と、先述の専門教育との間には必ずしも整合性の了解ができていないといえない。そこで本研究では、社会福祉系大学において、特に、1年生の学生に着目して、詳細な分析とそれに基づいた導入教育のあり方を検討する。大学生の状況を把握するため、アンケートや授業実践事例検討によって、入学直後の学生の状況を把握する。特に、高校時代の進路希望の推移と高校卒業時の進路選択に関する満足度及び大学入学後の満足度、社会福祉系大学への入学1年目の体験的学習に関する分析と考察を行い、福祉系大学生のキャリア形成に関して考察を行う。

(2) 社会福祉系大学生へのアンケート調査

調査の概要

社会福祉系大学への入学動機や高校時代の進路希望推移を把握するために、1年生を対象としたアンケート調査を実施した。調査対象は日本福祉大学社会福祉学部1年生であり、調査時期は2010年5月、調査方法は質問紙を用いた集合調査である。調査項目は、大学への入学動機・高校時代の進路希望推移および高校卒業時の進路選択に対する満足度などである³。

結果と考察

調査の結果、大学1年生211名から回答を得た（回収率：94.4%）。属性は男子88名、女子123名である。社会福祉系大学生が高校時代にどのような進路に進もうと考えていたかを調べた。その結果、高校入学時には進学⁴が76.7%、就職が3.3%、未定が20.0%である。進学者の中では

一般進学⁵が48.6%、福祉進学が28.1%であり、一般進学が福祉進学を大きく上回っている（図1）。

図2、3は大学生の属性（性差）による高校時代の進路希望推移の比較である。男子は、高校入学時には約半数が一般進学を希望しており、福祉進学希望は2割以下に留まっている。2年後期から急激に一般進学から福祉進学へと変更する者が増加し、3年後期から卒業時までその傾向が続く。未定者は2年後期においても1割以上を占め、女子に比べて進路決定を引き延ばす傾向がみられる。また、卒業時には一般進学を選択しているものが8%近くおり、一旦、一般系の大学に入学した後で、翌年以降に社

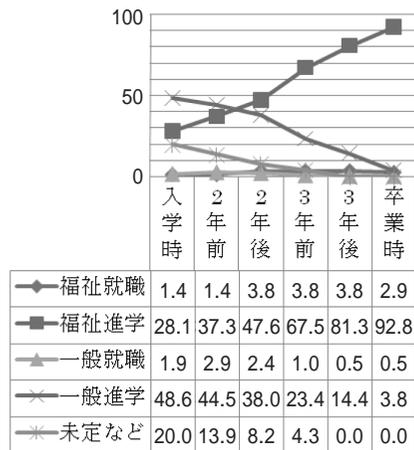


図1 大学生の高校時代の進路希望推移

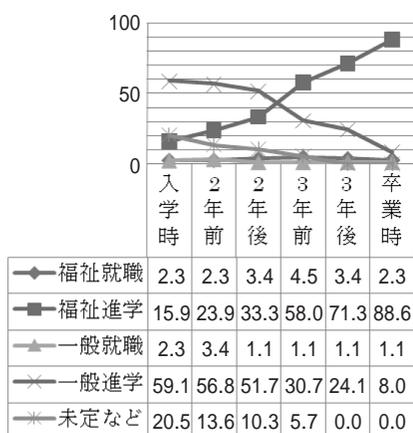


図2 社会福祉系大学生男子の進路希望推移

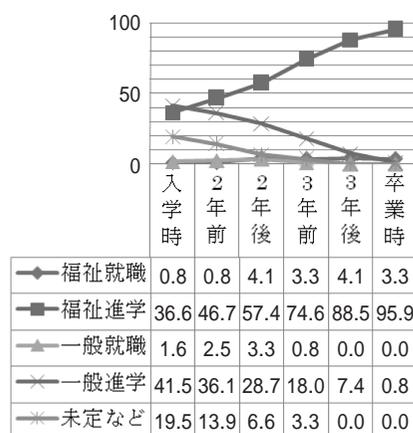


図3 社会福祉系大学生女子の進路希望推移

会福祉系大学へ再入学していることがわかる(図2)。一方、女子は、高校入学時から3割以上が福祉系進学を考えており、入学直後には一般進学者を越して増加し続け、3年後期にはその傾向が一段落する傾向が見られる。未定者は入学時には男子と同程度の2割近くであるが、入学後から減少し、2年後期には男子の半数近い割合となっている(図3)。

次に、社会福祉系大学生が高校時代に行った進路選択に対する満足度を検討した。その結果、高校卒業時に満足(非常に満足・やや満足)していた者は約6割であるが、調査時点(入学した年の5月上旬)には約8割に増加している(図4)。また社会福祉系大学への入学動機別に満足度(平均値)を比較すると、福祉への明確な動機(資格取得・進路・勉強)を持つ者の満足度が高く、「他学部が嫌」、「何となく」などの消極的な動機による入学者は満足度が低い結果となっている(図5)。中でも、福祉の勉強を入学動機とする者の満足度が高いことから、福祉の専門的な授業や勉強に対するニーズが満たされつつある状態への満足、換言すれば、福祉の勉強を目的として入学した学生にとっては目的と内容の適合性が高いことを示しているといえよう。逆に、

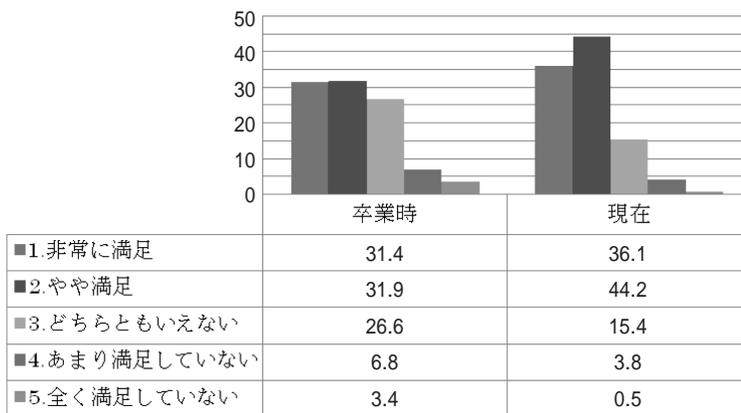


図4 社会福祉系大学生の高校卒業前後の進路選択満足度

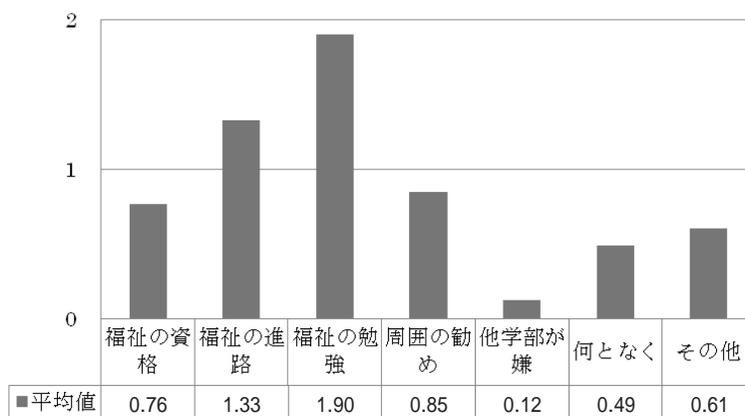


図5 社会福祉系大学への入学動機と満足度

「何となく」などの曖昧な動機によって入学した者は、高校卒業時及び大学入学後の満足度はどちらも低い結果となっている。したがって、社会福祉系大学1年生は、福祉の勉強に対する意欲や資格取得などへの明確な目的を持つ者と、「他学部に行きたくない」、「なんとなく」など消極的、曖昧な動機で入学する者が混在していると言えよう。したがって、大学の導入教育においては、学生の授業に対する意欲に個性や多様性があることを認識して、カリキュラム策定や授業運営を進める必要があると考えられる。

2. 体験的学習活動報告

調査結果に示された社会福祉系大学生の入学前の進路選択経緯を踏まえて、入学後の大学生活に関して実証的に検討する。その際に、筆者が授業担当として関わっている社会福祉学部社会福祉学科1年生ゼミ「総合演習」の事例を取り上げて、学生の学習活動を検証したい。

ゼミの運営にあたっては、学部で共通使用しているテキスト「総合演習の手引き 学問の道」に示されている内容を基本とした。さらに、シラバスの目的に加えて、生活基盤確立と体験学習を通じた学習権の具現化をゼミ独自の目的とした。体験的学習は、地域社会で現実に起きている多様な福祉課題に触れ、その解決に向けた社会福祉の視点と人権意識を涵養する目的で、班に分かれてフィールドワークを行った。以下、学びの一端を、学生のレポートを引用しながら考察を進めていく⁶。

(1) 保育所・幼稚園の子どもたちの育ちと環境への検討（児童福祉班）

児童福祉に関心のある学生たちのグループは、フィールドワークで、地域の保育所（保育園）・幼稚園とその周辺地域への調査や幼児の遊びに対する参与観察、周辺住民へのアンケート調査などを行った。学生のレポートには、「保育所周辺は自然豊かで子どもたちにとっては過ごしやすい環境なのではないかと感じた。実際に保育所の子どもたちは外で遊ぶ時に虫取りを楽しそうに

していた。男の子だけではなく、女の子も虫に抵抗なく触れていて驚いたが育つ環境によって違ってくるのだと感じた。私の近所の子どもたちは男の子も虫が苦手らしく、虫に触れたこともない子が多いそうだ。「キャンパス周辺は自然豊かで、子どもたちがのびのびと元気に遊べる環境に恵まれており、都会では見ることのできない星の美しさや、空気のきれいさも感じることができると、大学周辺の緑豊かな自然環境が幼児の日常や遊びに影響を及ぼしていることへの気づきが綴られている。また、「お年寄りなど昔から地元に住んでいる方が多いらしく、地域の絆が深いように思えた。フィールド調査を行っている最中にもすれ違った方がお辞儀をしてくれたり、挨拶をしてくれて嬉しかった。知らない人にも挨拶をすることは私の住んでいる地域ではめったにないことで、やはり土地柄によって違ってくるのだと感じた。保育所でも定期的にお年寄りを呼んで発表会などを催しているそうだ。そういった場を通じて、住民同士の絆も深まっていくのだと思う」と、保育所と地域住民のつながりが日常的な交流を通して熟成されていることに気づいた。

学生たちは保育所や幼稚園への訪問調査と並行して、周辺地域の安全性にも目を向け、地域課題としての交通問題にも取り組んでいくことになる。次のフィールドワークではキャンパスから少し離れた保育所とその周辺を調査した。その結果、「路側帯が狭く、工場などが多いので速度の速いトラックなどが往来し、小さな子どもやお年寄りなど住民みんなが危険だと思われた」。そこで、住民30人に対して交通問題に対するアンケート調査を実施した。その結果、道路の「改善が必要」が全体の8割近くにのぼっていることが分かった。同時に、その他の回答として道路の改良工事に伴う騒音や工事費用の支出に対する懸念から、「道路は改善してほしいが騒音は困る」「工事に使う費用があれば自分たち高齢者福祉に財源を使ってほしい」など、多様で率直な住民の声を聞くことができた。

これらの活動を通して学生たちは、子どもの育ちにとって豊かな自然や住民の絆が必要であり、地域の安全や交通問題への取り組みも重要であることを学んだ。それと同時に、地域ニーズの把握のために実施した住民アンケートの結果から多様な利害や経緯が複雑に絡み合っている現実社会の様相にも直面することになった。



地域調査によって得られた資料（道路や街灯）

(2) 福祉の理念と現実社会とのコンフリクトへの気づき（ノーマライゼーション班）

ノーマライゼーションなど福祉の理念をテーマに取り組んだグループは、県立養護学校がバリアフリーやユニバーサルデザインに配慮し、近隣高校との交流活動や個性を重視した取り組みなど、福祉の理念が具現化されている現場に立つことができた。しかし、養護学校の教員は、障害児の経管栄養への対応など、生命に直結する仕事の厳しさも学生に語ってくれた。障害児教育の実際を経験したことにより、大学内のバリアフリー調査を行うことになり、学生や教職員の意

識改善、講義棟や食堂・トイレの改善などのバリアフリーの必要性を認識した。

高齢者福祉分野では特別養護老人ホームを訪問し、ユニットケアの質の高さに触れると同時に、100 人を超す待機者が存在するという現実的な矛盾にも直面した。その後、町役場を訪問して、多様な福祉サービスとそれを支えるフォーマル、インフォーマルなサポートシステムの状況を把握した。

学生は、「県立養護学校や特別養護老人ホームなどのフィールドワークで現場の話を聞き、ノーマライゼーションの実現を図るために、利用者一人ひとりのことを考えて福祉サービスを提供していることが分かった」などと、養護学校の教職員や福祉現場職員の専門職としての使命感や努力が、障害者や高齢者の QOL を支えていることを認識した様子が記されている。さらに、「養護学校や老人ホームへのフィールドワークだけでは、福祉の現状についてまだ見えない部分があり、地域コミュニティを形成する課題が残っていることを学んだ。従って、今後の大学生活では、他分野にもフィールドワークに出かけて、今回の学びと比較したり、大学の講義で社会福祉を広く学び理解していきたい。福祉は高齢者や障害者、戦傷病者だけが対象ではなく、非正規雇用者やワーキングプアの方への生活保護などの支援も充実させる必要がある」、「福祉には課題が多く、解決されても新たに次々と生まれる。従って、福祉について新しいことを勉強していきたい」と、学生たちはフィールドワークで得た学びを、大学の講義や研究課題につなげていく姿も見られた。

(3) 福祉コミュニティにおける NPO からの学び (NPO 班)

学生たちは、地域で活動している NPO 法人を訪問し、 本学の障害者支援のゼミ研究から設立されて、現在も卒業生・在学生を中心に運営されている事、 2003 年の支援費制度開始に伴い地域住民が設立した NPO 法人が、子どもや高齢者・障害のある人や外国の人など多様な人々の「誰もが願う当たり前の暮らし」を実現するために活動している事、 単身赴任者の生活上の困難から始まったものが、市民と行政の協働で運営されている事などを学び、種々の NPO 法人が地域の中核としての役割を果たしていることを認識した。

また、様々な NPO 法人において、障害者や高齢者の生活不便を解決しようとする住民参加の具体を学ぶことができた。さらにボランティアやネットワークの重要性も認識できた。「NPO では、利用者の方から相談を受ける上で大切なことは、つながり、ネットワークを持つことである。例えば、障害者支援の NPO は本学の障害者支援センターと連携しており、今のようなことで困っている学生がいるかななどの情報を提供してもらっている」、「また地域への発信、啓発の重要性にも目を向けている」、「もう一つ同じネットワークとして大切なのが大学との連携も大切だが、地域とのネットワークも NPO 法人活動において重要になってくる。啓発活動では、地域の学校や講座などで障害がある方の生活や誰もが暮らしやすい社会について語ったり、学校を訪問して車いすの実践体験を行ったり、社会福祉協議会のイベントにも参加したりと様々なところで地域の方々と関わり、NPO の活動について知ってもらう機会を作っている」と、学生は NPO での

フィールドワークを通じた学びの成果を記している。

(4) 地域の福祉社会システム連関への問い (地域福祉班)

本学が現キャンパス (愛知県知多郡美浜町) に移転した当時 (二十数年前) の日本は、障害者にとって物理的にもバリアの多い社会であった。従って、学生はその当時のことに関して、「設立当時では全国でも珍しい施設・設備が多数整えられた『バリアフリーキャンパス』であった」と、相対的な優位性を評価している。しかし、その後、社会のバリアフリー化の進展に伴ってスロープや手すり、エレベーター設置などが普及したために本学のその度合いは相対的に低下する結果となった。そこで学生たちは、地域の福祉社会システムの関係性に着目して、大学周辺のその調査や社会福祉協議会への訪問、障害者の社会就労施設での交流などを通して考察した。その結果、バリアの可視化を体験して、障害学生への具体的なサポートを模索し、地域密着型の社会福祉協議会の具体的活動と福祉人材不足の深刻さを体感し、障害者施設でレクリエーションを披露して交流する中で、障害の多様性や施設職員の労働過重の現状を認識した。今後は大学と社会福祉協議会や福祉施設における有機的な連携が課題であるとした。

3. 導入教育としての体験学習

(1) 大学における学問の基盤となる「規律」

このような体験的学習活動にとって、入学期の生活基盤の確立が重要であると考えている。中でも最も重要な時期は入学直後の数ヶ月 (いわゆる「黄金の時間」) であるとの認識に立って、規律ある学習態度の確立を目指した。具体的には、他県からの入学者をはじめとして下宿生が多く、また県内であっても遠方からの通学者も多いため、基本的生活習慣の確立には特に注意を払ってきた。ゼミは金曜日の1限目であり、週末の疲れなどで遅刻や欠席も懸念されるため、寝坊などによる遅刻に関しては即時に対応し、クラス全員が揃ってゼミに参加できるように呼びかけを行った。これに対して学生は、「先生は、授業に来ていない人には私たちに連絡をとるように指示し、皆で授業を受ける大切さを教えてくれる」など、高校から大学という自由で自主性が求められる生活への橋渡しの役割を評価する声も聞かれる。

未成年者としてのマナーや、自炊学生をはじめとした食生活や金銭管理などの基本的な生活習慣を確立するように働きかけた。また、授業においては姿勢の保持や鉛筆の持ち方を始め、私語を慎み、場にふさわしい服装や言葉づかいなど規律ある学習態度の修得を呼びかけた。これらは本来、大学入学までに家庭や地域、学校教育の中で身につけている学習の前提条件であるが、必ずしも定着しているとはいえず (現に、鉛筆の持ち方が正しい学生は、20人に1人いれば良い方である)、それを改めて確認することにも意味があると考えている。こうした基本的態度の確立は、海外からの留学生や様々な環境で育ってきた多様な学生が円滑に大学生活を送るための導入教育としても、また社会人としての常識や基本的マナーを身につける上でも一定の意義がある

と考えている。さらに、図書館セミナーや図書館活用の推奨は、学問の基礎的資源の活用として有意義である。大学入学という人生の大きな節目に立つ新入生にとって、図書館は知の腐葉土のような存在であろう。一粒の知の種が腐葉土に着地して、やがて小さな双葉から幹や枝葉を伸ばしていくように、すぐれた書物から多くの知識や最新の情報を得て大学での学びをより豊かに結実させてもらいたい。学生たちはフィールドワークで出会った現実社会の事象をとらえて大学に持ち帰り、図書館の文献で福祉の理念や歴史と照らし合わせることにより、学びを深化させることが出来る。それらをゼミにおいて考察し合い議論を交わすことで、その後のより良いフィールド再調査や活動の発展につながることを期待できよう。ゼミではまた、体験的学習活動に基づくレポート作成を行い、自己と向き合い学習へのリフレクションにとって効果的な活動を行っている。夏休みには5千字、冬休みには2万字のレポート作成の課題を提示して、フィールドワークにおける調査・研究活動の結果明らかになった事実と課題を客観的に筋道を立てて書いていく作業を重ねた。これについて学生は、「ゼミに所属して、フィールドワーク中心の活動から、高校では学んだことのないことをたくさん経験することができた。またゼミではレポートが多く、最後の2万字レポートでも文章を書くことに慣れてきたように思う。最初は2万字と聞いて絶対に書けないと思ったが、2万字書き切ることができて、とても達成感が得られた。これからの先の講義などでもレポートを書く機会は多いと思うが、この2万字レポートとゼミで体験したことが力になっていくと思う」などと述べており、字数の多さに驚きながらも、着実に表現力や記述の能力を向上させていることがうかがえる。

ゼミでは学生自身が極力、教室の前に立って板書やスピーチなどの活動を行ったり、グループワークや学外でのフィールドワークの機会を多く設定することを企図した。12月に実施される学部1年生の全体発表会では、クラスメンバー全員がマイクの前に立った。それらの場面では、「失敗を恐れない、未完成の中に成長のヒントがある」との趣旨で、学生自身が考え、話し合い、行動し、振り返り、文献に学び、再構築した活動から学び、考察し、発表し合い、新たな課題を発見するという体験的学びの循環システムを構築するように心がけた。

また、アンテナを高くして情報収集することに努め、年度途中で学生の学習チャンスが発見できたとき（他学部との共同の学習や合同発表会、海外からの講師来日、学会開催など）は極力、日程調整をして参加（可能な場合は参画）できる体制を取ってきた。これらの一連の活動は、学生の学びの場を閉鎖された大学や教室に限定することなく、広く社会や世界との連環の中に存在していることへの認識や、現実社会が内包する矛盾や多様な価値に触れることが、大学入学期には特に重要であるとの認識に基づいている。

(2) 対人援助職としての「つながる力」へのアプローチ

学生たちは地域に出て多くの学びを得た。フォーマル、インフォーマルな福祉現場において高い志を持って日夜奮闘する人々の姿に感銘を受けると同時に、個人の熱意や努力を超えた制度・システムの矛盾や不備にも直面した。様々な気づきを通してこれらの福祉課題への気づきをもと

に、調査を重ねて住民とともに行政などに働きかけるソーシャルアクションの必要性や、2年生以降の大学での授業や自己の研究課題への取り組み、卒業後の進路への抱負や見通しも構築されつつある。

クラスメイトとの連帯

総合演習のフィールドワークを通して、ゼミ学生同士、学生と教師の関係も深めることができた。学生のレポートにも以下のような記述がみられる。「ゼミはみんなが仲良しで、明るいくラスで、授業には真剣に取り組む仲間が集まった最高のゼミである。はじめてみんなで顔合わせをしたときもすぐに話かけ、すぐ仲間となった」、「春季セミナーで私たちはラインダンスをすることになり、誰も練習をサボらず一生懸命練習に励んだ。本番でも練習の成果が出て、綺麗なダンスを踊ることができた。本番終了後は皆で『よくできたね』、『楽しかったね』など、ゼミの仲間たちとの絆を確かめあった」、「前期の最後の授業では、『愛とは何か』をテーマにした少しユニークな討論も行い、『愛とはお互いを受け入れること』、『愛は憎しみに変わることもある』など多彩な意見を出し合い、愛とは何かを考えその大切さを学ぶことができた」、「12月の合同発表会の準備はとても大変であったが、本番は練習が活かされて、素晴らしい発表内容だったと思う。発表に向けて空き時間に班メンバーで集まって準備をしたが、活動の報告や全員の意見をまとめることが大変で、多くの時間がかかった。みんなで協力したおかげで、本番に間に合わせることができた。私は元々、人前で話すことが得意な方ではなく、発表はとても緊張した。また、積極的に動くことができず、班の仲間に任せきりにしてしまった部分もあった。しかし、発表を成功させるという同じ目標に向かって頑張ることで、ゼミ仲間の団結力が一層深まったと思う。発表会当日は、全員が発表し、服装もスーツで揃えるなど、私たちのゼミらしさが出ていたと思う」。

楽しさやあたたかさ・悲しみや不安の感情体験とその背景の考察

学生はフィールドワーク先での活動場面において、様々な情緒的・感情的な体験を積み重ねることができた。保育園や幼稚園での乳幼児との触れ合いでは、「自分の幼稚園時代のことも思い出して懐かしく感じた。何より、子どもたちとたくさん触れ合って楽しい思いをたくさんすることができたので、とても良いフィールドワークになった」と述べた後で、「楽しい保育現場は保育者自身で作上げるものだと言った。おままごとの小屋や道具が足りない時には、小屋の代わりにテントや跳び箱を使い、葉っぱや木切れ、空き缶や使い古した食器や台所用品で代用する。ボールを新聞紙で作ったり、ブランコを木の枝を利用して作ったり、古タイヤに砂を入れて砂場にしたりする」と、「楽しさ」は専門職の努力や工夫によって用意されていることに気づいていく。

新入期の緊張と不安は程度の差はあれ多くの学生が経験する。特に、受身の講義と異なるゼミに対しては、「最初に、『フィールドワークをする』と言われた時は、内心できるのだろうかかと不

安に思ったのも事実である。フィールドワークによって、何を自分自身が得る事ができて、どのように今後につながるのか、可能性は未知数で無限大だった。大学に来て、どれだけの経験ができるのか恐れていた部分もあった。しかしフィールドワークを自分たちで計画し、活動先と交渉して行動に移す。それらの全てが、今の自分にとって糧になっている。人間関係の難しさや男女間の問題、自分が進んで行動するべきタイミングもフィールドワークを通じて学ぶことができたなどと、不安の中で踏み出したフィールドワークから多くの経験と学びを得たことが記されている。新生生の時期は、大学生活の授業や諸活動に対して様々な不安を抱えていることを、教員も改めて認識する必要があるのではないだろうか。

地域や家庭における人間関係の希薄化が指摘される時代にあって、大学1年のゼミではどのように学生や教員の間を結んでいくのかが問われている。現代の学生についてコミュニケーション技術の欠落を嘆いても始まらないであろう。大学への入学を許可し、学び舎に受け入れた大切な学生一人ひとりとのように向き合うのか、教員自身もまたコミュニケーションの希薄な時代をどのように生きていくのかを自らに問いかけ、学生の「声なき声」に耳を傾け、ともに考えて行動し、言語化して表出する営みを日々積み重ねていくことが今まさに求められていると言えよう。

例報告 ひとりの学生の育ちの記録 過去と未来をつなぐ「今」

本稿ではこれまで、社会福祉系大学生の体験的学びを通して児童福祉や障害児教育、高齢者福祉や地域福祉など様々な現場で生み出される豊かな実践や厳しい現実、困難や矛盾などに会ってきた。これらの教育実践は多様な学生たちの集団的かつ体験的な学びによって生み出されてきたが、学生の個性や学生の個別的な変容・成長の過程を検証する事も同時に必要である。総体としてのゼミ運営が一見順調に感じられたり、研究成果が実をあげていたとしても、それが一部の学生の活動であったり、突出した力を持つ学生たちだけの姿であってはならない。そのような視点に立って、今年度の学生（草柳：仮名）が夏休みに作成した5千字レポートをもとに、入学時から半年足らずの内面の変化や活動の経緯、さらにゼミを取り巻く大学内外での地域生活やアルバイト、家族との関わりなどで、大学入学によって引き起こされた草柳の身辺の変化を追ってみたい。

「なぜ私が大学に入ったのか。私は幼い頃から勉強ができる方でもなく、将来の事なんて考えていなかった。福祉について考えた事もなく、遊んでばかりいた。高校を卒業して適当な職に就ければいいと考え、進学の話は考えてもいなかった。兄は勉強ができて大学に行ける学力を持っていたが、私は違った。他人に迷惑ばかりをかけていた人間だったかもしれない」と、将来への明確な目的を描く事や勉強する事もなく高校生活を送っていた当時を振り返っている。

そんな草柳が福祉に関心を持つ出来事が起きた。「自分がこのままでいいのだろうかと考え始めていた。ある日、老人ホームの前を通った時に目にしたのが、高齢者が介護士に笑顔でお礼を言っているところであった。その笑顔を見て私は、他人を助けて笑顔が見てみたいと考えた」草

柳は社会福祉系大学への進学の意味を家族に告げるが、「自分はそれまで何かに本気で取り組んだ事がなく、母は専門的な大学は難しいからと進学を許してはくれなかった」。社会福祉系大学に行く事を諦めた彼は、老人ホームでボランティアを始める。ある日、高齢者が介護士に向かって、「あの花に触りたいけど、歩いて行く事ができないから悲しいわ」と、とても悲しそうな顔で言われた。しかし草柳は何もできない自分の無力さと、「多くの事を学ばなければ、人を助け笑顔を見ることはできない。自分は福祉をしたいと思うばかりで何も知ってはいなかった」と、改めて社会福祉の専門的な学びの必要性を痛感する。また、テレビ報道で日本の少子高齢化社会の現状を知り、福祉の情報を集めて真剣に学ぶ彼の姿を見て、母親は社会福祉系大学への進学を認めてくれる。こうして大学入試の壁と向き合う事となる。「推薦入試に向けて社会福祉関係の本を読むと、自殺者数や非正規雇用者の問題やグラフも書かれていた。はじめは正直、今までの罪滅ぼしとの考えもあったが日本の現状を知って、『世の中の役に立つ、人を手助けできる人間になりたい』と考えるようになった」。草柳は小論文に挑戦するが成果があがらず悩んでいた時、単身赴任が終わって家に帰ってきていた父が声をかけてくれた。「少し気まずかったが、父に入試の手伝いを頼んだ。過去問の小論文を書いて父に読んでもらう中で、父と私は笑いながら話ができるようになった。家族は私の事をもう諦めているのかと考えていたが、父は夜遅くまで私の受験勉強につきあってくれた。私はただ捻くれていただけだったのかもしれない。気づいたら私は、父に気なんてつかわなくなっていた」。真剣に受験勉強に取り組む中で、父子の関係も親密さを増していく様子が綴られている。

また、高校教師も、「私の背中を叩いて『頑張れ』と何度も」励ましてくれたり、福祉の勉強を親身に教えてくれ、「人間なんて自分の事しか考えず、利益がない限り動かない」と思っていたのは大きな間違いで、「人は他人を助けて何かを学び、助けられた側も何かを学ぶ」と、家族や教師の支えと励ましの中で、人としての無償の行為の意味を学んでいく。入試後、「何かに頑張ったその結果に喜ぶ経験がなかった。『落ちたら支えてくれた多くの人達をがっかりさせてしまう』と母に話すと、『あなたが頑張った姿を見た事で十分』と言ってくれ、私の心は晴々しくなった。「結果は合格だった。丁度、下宿していた兄が帰っており、私を『見直した』」といってくれた。兄と会話したのは6年ぶりぐらいだった。正直、今まで兄が羨ましかったのかもしれない。勉強もできて母や父に期待されている兄に認められた事、母と父の喜ぶ姿、合格した嬉しさ、私は涙が出てきた。学校でも、『職員室で噂になっている』と福祉の補習をしてくれた先生が言っていた。私は受験勉強を通して、家族や高校の教師に素直になる事ができ、絆も深まった。人は一人では生きていけない事を学んだ」。

実家から離れる日、「朝の4時に家を出た。友人からは多くのメールが来て、『がんばれ』の言葉が心に染みだ。大学に着いてアパートに引越し準備をしていると母が急に涙を流していた。大家さんが『大丈夫ですか』と聞いたら、母は『苦労した子ほどかわいい』と。自分は母にかわいがられていた事に今まで気づかなかった。諦められているのだと考えていた時期があったが、それは違った。自分まで涙が出そうになったがこらえた。母にいつか恩返しをしようと考えた」。

一人暮らしの心細さと不安の中で授業が始まったが、ゼミが心配だった。「自己紹介も苦手で、自分に自信もなく、人に話かける事ができなかったが、最初のゼミで先生が、班メンバーやテーマを決めるように指示したり、色々な活動に積極的に参加させてくれたおかげで、班の人達とすぐに仲良くなる事ができた。4月のフィールドワークでは、駅から大学までの道を障がい者の人達にとっては何が不便かを調査した。当たり前のように通っている道はすべて人の手によってつくられ、完璧な存在ではない事実にも気づいた。フィールドワークで、『ここは危ないよ』と声をかけ合う中で会話も増えていった。ゼミ活動で5月の学内学会や7月の福祉教育研究フォーラムに参加して、討論や発表を聞く中で、多くの人が福祉の事を考えて活動していることを知り、感銘を受けた。私はこのゼミでなければゼミに溶け込む事もできず、今も一人だったかもしれない。そして、障がい者の人が地域社会で生活するためには手助けが必要であると学んだ。最初、このゼミは厳しいと先輩方から聞いていたので、正直ついていけないのかと心配ばかりしていた。しかし、積極的に何かに取り組む事によって、学ぶ事が楽しく感じられてきた。このゼミでよかった」。草柳はゼミ活動を通して多くの人と出会い、新しい経験の中から様々な学びを得て成長している。

夏休みには、筆者らが高校生・大学生とともに制作したDVD「ふくしの学びと仕事」を、母校を訪問して恩師に渡す課題を出した。草柳も久しぶりの母校へ緊張して訪問すると、「担任の先生は優しく迎えてくれて、『立派になった』とお茶を出してくれた。厳しかった先生がこんなに笑顔で迎えてくれ、泣きそうなほど嬉しかった。人の笑顔がこんなにも温かいものだ」と学んだ。ゼミに入ったおかげで、母校の先生と大学の話や一人暮らしの大変さなど様々な話ができる。ゼミで言われないかぎり私は母校を訪れる事はなかったであろう」という経験を綴っている。また、下宿生活によって、家事の大変さや甘えた生活を送っていたことも気づき、「お金の面でも苦労し、生活の為にバイトを探したが近くで見つからず、授業の後、50分かけてそこに行くのは辛かったが、バイトの人は優しく、店長もこちらの都合に合わせてくれた。バイト先は飲食店でありお客さんとの触れ合いが重要であるが、何よりやる気ができるのはお客さんの笑顔である。それまでは、食事は両親が面倒をみってくれるから遊ぶお金を稼げば良いと考えていたが、下宿では、生きていく為のお金が必要であった。食事も楽をしようとインスタント類に手を出して風邪をひいてしまった。病院に行く元気もなく、外にゴミを捨てに行こうとしたら大家さんが話しかけてくれ、事情を説明すると病院まで連れて行ってくれた。他人の為には何もしないのが人間だと過去に考えていた自分が恥ずかしく、私は、まだまだ子どもだったと自覚した。大学に勉強をしに来たつもりが、バイトや下宿など様々な面で考え方が変わり、甘さにも気づく事ができた」と、地域のバイト先や大家さんとの出会いと支えが、草柳の自立に向けた学びを深めている様子が記されている。

5千字レポートの最後で草柳は、「入学当時は、社会福祉の資格を取ったら立派な職に就き、困っている多くの人を助けようと考えていた。しかし今、できる事がある。私は、入試や大学生活で多くの人に元気づけられ、救われた。救ってくれた人達は、福祉の資格や免許を持っている

訳でもなく、福祉の職業と関係のない人達もいる。『今できる事、今の時点でも多くの人を救う事はできるのではないかと、今は考えている。『就職したら』でなく、大学生活でも多くの人を助け、人として当たり前的事をしていきたい。入試から現在まで、私にとって、人生が変わるような経験であった。多くの人の助けのおかげで今の自分がある事を自覚し、頑張っていきたい。そして、すべての先には、両親に恩返しをする事が目標である』。

草柳は、人とのつながりが疎ましく信じられなかった時期もあったが、家族や教師、友人に支えられて社会福祉系大学入学に取り組む中で、内面的な変容を遂げる。周囲の人々との関わりは「横のつながり」と解釈できるが、過去を顧みて、人として当たり前のことをしたいと考える「今」、両親に恩返しをする「未来」、この時間軸は「縦のつながり」とも解釈されよう。それら「縦と横につながる力」もまた、草柳の人的な成長を刻む原動力となっている。

4. おわりに

間もなく夏休みが終わり、草柳をはじめ学生たちの笑顔と歓声がキャンパスに戻って来る。後期のゼミでは、これまでの体験的学びを発展させる活動として、10月の日本社会福祉学会や11月の日本福祉教育・ボランティア学習学会とゼミ合宿、12月の3ゼミ合同発表会や先輩たちのサービ斯拉ーニング発表会、卒論発表会などの場につなげていきたい。

草柳が見出したように、「ふくし」は資格や職業として存在する前に、「人として当たり前の」行為であり営みである。教室に座る学生一人ひとりが、草柳と等しく幾多の紆余曲折を経て今ここにあり、胸のうちは不安や戸惑い、喜びや悲しみの感情を抱えていることを改めて認識したい。社会福祉系大学生が、過去と未来をつなぐ「今」としての学びの場で、「つながる力」をどのように育んでいくのか。教育や研究を通して、その問いに向き合うことが今まさに求められている。

注

- 1 社団法人日本社会福祉教育学校連盟によれば、社会福祉系大学などにおける卒業生の「福祉職離れ」も加速している（2009「社会福祉系学部・学科・大学院卒業生の進路など調査報告書 2008年3月卒業生対象」社団法人日本社会福祉教育学校連盟）。
- 2 日本学術会議第18期社会福祉・社会保障研究連絡委員会「社会福祉・社会保障研究連絡委員会報告『ソーシャルワークが展開できる社会システムづくりへの提案』」2003 添付資料。
- 3 調査は無記名自記式自由回答で、回答者が特定されることや回答内容によって不利益を受けることはなく、研究機関の倫理審査において倫理上の問題はないとの承認も得た。
- 4 進学とは、専門学校・短大・大学その他の進学を全て含む。
- 5 一般進学は、福祉進学以外であるがどの分野に進むかを決めていない者も含まれる。
- 6 本稿では、主として一昨年度（2008年）、昨年度（2009年）、今年度（2010年）のフィールドワークを軸とした学習活動を分析対象として取り上げている。詳細は、2008年度・2009年度「総合演習 報告集 地域に学び仲間と創る 日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科1年 岡多枝子クラス」（日本福祉

大学図書館所蔵). なお, 本論文の作成に当たり, 学生のレポートの一部を匿名化, 及び字句修正などの変更・加筆をおこなった.

- 7 日本福祉大学高大接続教育推進室と, 日本福祉大学サービスラーニングセンターの協働により, 高校生に対する福祉の啓発ビデオを制作した.

参考文献

- Crites, J. O. (1973) *Theory & Research Hand book for the Career Maturity Inventory*. McGraw-hill.
- Fitzgerald, Joan (2006) *Moving up in the New Economy: Career Ladders for U.S. Workers*. Cornell University Press. (= 2008, 筒井美紀・阿部真大・居郷至伸訳『キャリアラダーとは何か アメリカにおける地域と企業の戦略転換』勁草書房.)
- 片山善博 (2007) 「差異と承認 共生理念を構築を目指して」創風社
- 原田正樹 (2009) 「共に生きること 共に学びあうこと 福祉教育が大切にしてきたメッセージ」大学図書出版.
- 藤崎宏子 (2008) 「訪問介護の利用者抑制にみる『介護の再家族化』 - 9 年目の介護保険制度 - 」『社会福祉研究』103, 2-11.
- NHK スペシャル取材班 & 佐々木とく子 (2008) 「『愛』なき国 介護に人材が逃げていく」
- 岡多枝子 (2006) 「ホームレスと高校福祉教育: 体験的学習の事例検討」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』11, 84-101.
- 岡多枝子 (2007) 「福祉系高校における生徒の入学動機と進路決定 動機の差異に応じた支援のあり方」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』12, 192-208.
- 岡多枝子 (2008) 「高等学校福祉教育における生徒の進路選択 進路希望の『変更と維持』」『東洋大学大学院社会学研究科福祉社会デザイン研究科紀要第 44 集』145-168.
- Super, D. E (1957) *The Psychology of Careers: An Introduction to Vocational Development*. Harper & Brothers. (= 1960, 日本職業指導学会共訳『職業生活の心理学 職業経歴と職業的発達』誠心書房).
- 善本純子・富岡和久 (2007) 「介護老人福祉施設における職員のバーンアウト傾向とストレス要因の関係について」『北陸学院短期大学紀要』.